



Sarasvati

サラスヴァティ 01

● 発行人／坂田マルハン美穂 ● 発行元／ミューズ・クリエイション (NGO) ©2026 Muse Creation 2026年7月



天窓からの光がやさしく降り注ぐ、我が家の「月光ライブラリ」。7歳のころの日記帳から最近のジャーナルまで、「紙」に刻まれた自分の記録の一部を広げた。2000年にホームページを開設してからは、紙に記す機会が激減したが、四半世紀を経た今、印刷物やノートの手触りが愛おしい。

創刊号 原点回帰

CONTENTS

1. 原点回帰。創刊のごあいさつ
2. ふたつの故郷。バンガロールと福岡を結ぶ
3. 福岡の中のインド／インド人僧侶、清賀上人
4. 芸術を司る女神、サラスヴァティと弁才天
5. 夏を彩るおまつり。博多祇園山笠とラタ・ヤートラ
6. 『サラスヴァティ』創刊の背景。アナログ回帰
7. 7月にまつわる個人的な体験／編集後記

- ❖ 「サラスヴァティ」とは、学問や音楽、芸術、弁舌などを司るヒンドゥー教の女神で、日本の「弁才天」の起源です。
- ❖ 「ミューズ」とは、ギリシャ神話に登場する芸術や文芸、学問、歴史、天文学などを司る9人の女神の総称。ミュージックやミュージアムの語源です。
- ❖ 現在のバンガロールの正式名称は「ベンガルール」ですが、同誌では、一般的に使用されている「バンガロール」と表記します。

原点回帰。



福岡市東区の名島海岸。
子どものころ、よく海を見に来た。

『サラスヴァティ』創刊にあたって。「月光&深海ライブラリ」を紐解きながら

『サラスヴァティ』は、2026年4月に海外生活30周年を迎えた坂田マルハン美穂が企画・編集する情報誌です。

●原点回帰。これからは、二つの故郷を積極的に探訪

わたしは18歳のとき、大学進学を機に福岡を離れた。以来、家族に会うために帰省していたものの、故郷への愛着は、さほど感じる事がなかった。わたしが幼少期に親しんでいた懐かしい海辺や山の情景は、日本の高度経済成長とともに姿を変え、「郷愁」を感じさせるものが喪失していたせいもある。

わたしの心境が変化したのは、COVID-19パンデミック後、久しぶりに帰省した2022年ごろからだ。母の高齢化に伴い、年に2回、数週間から1カ月を福岡で過ごすようになった。せっかくだからと名所旧跡を訪れるうち、古来から日本の玄関口だった福岡の地理や歴史の面白さに気付いた。若いころは、海外への旅情が強く、故郷はおろか日本の魅力を探ろうとさえしなかった。しかし、世界各地を旅し、異国に暮らす歳月の果てに、いつしか母国を客観的に見つめる目が養われていた。人生の2周目を迎えた今、「原点回帰」の心境に至っている。

2005年に移住したバンガロールも然り。バンガローリアンになって21年になるが、未踏の場所はたくさんある。福岡とバンガロール、二つの故郷の「灯台下暗し」を返上すべく、最近では、ローカルの歴史を学び、探訪を始めた。すると、両都市には類似点が少なくないことに気づいた。

結果、自分の発信の一環として、福岡とバンガロールを結ぶべく、活動をしようと決めたのだった。

●月光&深海ライブラリ。膨大な過去の記録を徐々に紐解く

表紙の写真にある我が家の「月光ライブラリ」。わたしのお気に入りの場所だ。ここには引っ越しを繰り返してなお、捨てられなかった本をはじめ、多彩なジャンルの書籍、わたしが編集・執筆した旅行誌などが所蔵されている。手書きの旅日記や両親宛に送った数百枚の絵葉書も、色褪せることなく残っている。世界各地の地図を開けば、たちまち旅の記憶が蘇る。

一方、インターネット上には、ニューヨーク在住時の2000年にホームページを立ち上げて以来の活字が残る。過去26年間、毎日のように書き溜めた無尽蔵の記録。折に触れ、大切な記録は「深海ライブラリ」と名付けたブログに転載してきた。月光と深海。どちらのライブラリも、しかし、ほとんど人目に触れぬまま、眠り続ける。テクノロジーが劇的に進化する昨今。誰もが瞬時に言葉を世界に発信できるようになった。文章も動画もどんどん短くなり、ぐるぐると巡る情報に脳が加熱する。一旦停止が必要だ。月光&深海ライブラリの、たとえ氷山の一角でもいいから、過去の記録を紐解きつつ、新たな情報も織り交ぜながら、昔と同じような情報誌を作りたくなった。

●「不易流行」を座右の銘に、表現方法を模索する

わたしが尊ぶ指針のひとつに「不易流行」がある。不易（ふえき）とは、時代を経ても変わらない「本質」を意味し、「流行」とは、時代に合わせた新しさや変化を意味する。江戸時代の俳聖である松尾芭蕉が追求した、俳句の根本的な創作理念を表現することばだ。伝統や不変の原理を尊びながらも、常に時代に即した新鮮な表現を追求する「不易流行」の理念は、俳句だけではなく、芸術、文化、倫理、道徳、ビジネス……とあらゆる場面で応用できるのではなかろうか。

個性的な人間力を損なわない表現方法を維持しつつも、テクノロジーの利点をバランスよく活用する。……不易流行を反映しながら、『サラスヴァティ』を編集し続けようと思う。



1985年以来、40年分のスケジュール帳が書棚の一隅に並んでいる

日本人にバンガロールを、インド人に福岡を伝えるために。
これから少しずつ、我が「ふたつの故郷」を紹介します。



バンガロールの創始者ケンペゴウダ1世（1510-1569）とバンガロール中心部の情景。キングフィッシャータワーより撮影



福岡の創始者黒田長政（1568-1623）と福岡市上空の情景。福岡発ソウル行きのフライトにて撮影。飛行時間は東京行きより短い

南インドを代表するバンガロール。南日本（九州）を代表する福岡。双方、古来から要衝として歴史的に重要かつ魅力的な大都市にも関わらず、福岡はインドで、バンガロールは日本での知名度が低い。近い将来、直行便が就航することを祈念しつつ（！）、『サラスヴァティ』は二都市の友好と交流を目指します。



●バンガロールと福岡。二都市の共通点

- * 地理／福岡は南日本(九州)の、バンガロールは南インドの玄関口として歴史的に重要な土地
- * 環境／一年中、快適な気候（バンガロール）と、日本でトップクラスの住みやすさ(福岡)
- * 観光／豊かな自然に恵まれ、神社仏閣、寺院などが各地に点在。ミュージアムや美術館も充実
- * 空港／ハブシティにふさわしい国際空港。両都市ともに、現在、拡張工事中
- * グルメ／古くから国際性に富んだ多彩な食文化とアルコールが愛される土壌
- * ショッピング／中心部では、新旧の魅力的なファッションやライフスタイルアイテムがそろう
- * ウェルネス／近郊に有名な温泉地（福岡）、アーユルヴェーダ療養施設（バンガロール）
- * 伝統工芸／織物や染物、陶磁器、木工製品など、職人技が生きた多様な伝統工芸品が息づく
- * 未来志向／テクノロジーやスタートアップの実績と未来の可能性。官民共同でのプロジェクト
- * 学術都市／教育、研究機関の成長と交換留学の潜在力。インターンシップに対する積極性……など

「東京とニューデリー」「大阪とムンバイ」「京都とチェンナイもしくはコルカタ」とするならば、「福岡とバンガロール」は似たようなポジションだと思いませんか？

仏教が日本へ公式伝来する前、インド人僧侶が福岡に上陸？ 雷山仙如寺を建立し、油山で灯火を作った清賀上人の伝説



今年4月に福岡へ帰ったとき、インドとゆかりのある場所を探した。するとインド人僧侶「清賀上人（インド名は不明）」の名が現れた。福岡県糸島市にある「雷山千如寺大悲王院（雷山観音）」や「油山観音（正覚寺）」を建立したとある。

清賀上人は、西暦178年、別説では572年に、インドから海路で博多に上陸したという。海辺から陸を眺めたところ、糸島方面の山の上に五色の雲が立ち、仏の姿が手を招くように輝いた。ゆえに、その方角にある雷山を目指したという。

日本に仏教が「公式に」伝わったとされるのは6世紀中ごろ。178年の説は怪しいにしても、彼は非常に早い時期、インドから直接、九州へ仏法をもたらしたことになる。

寺伝によると、清賀上人は、「仏法普及」と「灯明文化」の導入に尽力。雷山で仏像を刻み、雷山千如寺大悲王院を開山した。その後、全部で七つの寺を建立。「灯明」に使う油を絞るべく、油山の椿を用いたことが、この山の名の由縁だ。

奇しくもわたしの従兄弟が、しばしば雷山千如寺を訪れていると知り、ドライブを兼ねて連れて行ってもらった。上の写真は、五百羅漢像と清賀上人像（右下）。心洗われる寺院でしばらく過ごしたあと、名物の「牧のうどん」本店に立ち寄りランチを楽しむ。福岡はうどんやそばの発祥地でもあるのだ。食後、福岡市南区の油山へ赴き、清賀上人の足跡を辿った。ここにある葬祭場で父を火葬して以来、22年ぶりの油山だった。

*この日の記録は、ブログに詳しく残しています。 <https://museindia-rkmc.y.wordpress.com/2026/04/07/home16/>



雷山千如寺大悲王院。秋には見事な紅葉が見られるという



山道は木漏れ日が美しく、異世界のような感覚。まさに霊域



油山観音を建立した清賀上人の名が刻まれた石碑



油山観音近くの展望場所からは、福岡の街と玄界灘が見渡せる

我が原点。博多湾を望む名島海岸と「弁才天」 その起源は、ヒンドゥーの女神「サラスヴァティ」だった

◎玄界灘の彼方に異国を見る。海を望む故郷の記憶

熊本県荒尾市で生まれたわたしは、1歳のとき、福岡市東区に引っ越した。当時は区政が敷かれておらず、地名は福岡市名島汐見町（現在の千早）だった。「汐見」の名が示す通り、自宅から数百メートルも歩けば、名島海岸にたどり着いた。

しかし1970年代に入ってから近所の光景は急変する。砂利道は次々に舗装され、山は造成され、海は埋め立てられた。瞬間に無機質な団地が立ち並び、砂浜は消え、海岸線は遠のいた。それでも子ども時代のわたしは、しばしば名島海岸を訪れた。ハングル文字が記された漂着ゴミを目にしては、水平線の彼方の「よその国」に、思いを馳せたものだ。

名島には、福岡の歴史を語る上で欠かせない「名島城趾」や「名島神社」がある。1600年の関ヶ原の戦いで功績を挙げ、徳川家康から筑前国52万石を拝領した黒田長政は、名島城を受け取り、一時的に福岡藩の初代居城とした。しかし直後に福岡城が築城されたため廃城。現在は眺めのよい公園になっている。

◎弁才天の起源は、ヒンドゥー教の女神サラスヴァティ

黒田長政に居城の守護神として崇められた名島神社に接する宗栄寺には、平安時代から「弁才天」が祀られている。18歳で故郷を離れたわたしは滅多に来なかったが、両親は折に触れて詣でていた。琵琶を携え、優美な姿で岩に腰掛ける弁才天は、音楽、芸術、学問、弁舌などを司る女神として、日本各地で信仰されてきた。

インド移住直後に、ヒンドゥー教の女神「サラスヴァティ」が弁才天の起源だと知ったときには、驚くとともに、強い親近感を抱いた。聖なる川を神格化した水の女神サラスヴァティは、音楽、学問、智慧、弁説を司る。

4本の腕には、ヴィーナと呼ばれる弦楽器や、経典、数珠などを携えている。白いサリーをまとい、白鳥や白蓮、あるいは孔雀のそばに佇む優美な姿は、弁才天と重なる。



2025年の一時帰国時に購入した博多人形（伝統工芸の素焼き人形）の弁財天。巳年に因んで店頭で展示されていた。背後の絵は、ラジャ・ラヴィ・ヴァルマが描いたサラスヴァティ。

弁才天が仏教に取り入れられた当初は、「才能」を意味するべく「弁才天」とされていたが、江戸時代以降、蛇神や財福の神である宇賀神と習合したことから、「財」の文字が使われるようになったという。白蛇は弁財天の使いとされている。巳年のわたしとしては、益々ありがたい存在だが、個人的には「財」よりも「才」を尊びたく、「弁才天」と記す。

弁才天以外にも、日本では、インドを起源とするたくさんの神々が崇拝されている。たとえば「七福神」を構成する神々のうち、弁才天を含め、「天」がつく大黒天、毘沙門天もそうだ。今後少しずつ、日本の中のインドを紹介していきたい。



かつて名島神社は「名島弁才天社」と称され、弁才天も祀っていた。しかし明治維新後の「神仏分離令」により、仏法を流布する弁才天は神社から分離され、宗栄寺で祀られるようになった。色紙は実家にあったもの

「おんそらそばていえいそわか」
梵語で記された弁才天の真言

日本とインド。夏を象徴する、よく似たおまつり。 「博多祇園山笠」と「ラタ・ヤートラ」



博多祇園山笠の最終日を飾る追い山。法被にふんどし姿の男衆が、「おっしょい！ おっしょい！」と、かけ声を上げながら、山笠を担いで走る。迫力満点の夏祭りだ（写真はPhotolibaryにて購入）



オリッサ州のラタ・ヤートラ。今年は7月16日に開催

福岡の人々は、おまつり気質が強い傾向にある。特に、毎年7月1日から15日まで開催される「博多祇園山笠」は格別に盛り上がる。博多祇園山笠の歴史は1241年に遡る。当時博多で流行した疫病を退散させるため、承天寺の開祖である聖一国師が、祈祷水をまいたことが起源とされている。

毎年、巨大な飾り山笠が町の随所を彩る。最終日15日の早朝、高さ約10m、重さ約1トンの豪華に飾られた「早（か）き山笠」を、博多の7つの流（ながれ）の男衆が担いで疾走する「追い山（おいやま）」がクライマックスだ。山笠は、博多の

総鎮守である「櫛田神社」に奉納される神事であり、山笠にまつわるすべての行事が櫛田神社を中心に執り行われる。

一方、インドのオリッサ州では、6月から7月にかけての1週間あまり、ヒンドゥー教最大級の神輿祭り「ラタ・ヤートラ」が開催される。10世紀ごろの発祥とされるこの祭りは、京都の祇園祭や博多祇園山笠との類似点が多い。巨大な木製の神輿に神聖な像を載せ、大勢の人々が力を合わせて移動させる点。また視覚的な迫力と掛け声の賑やかさ、疫病退散や厄除けを祈願する夏の祝祭、地域コミュニティの結束と伝統の継承などだ。



博多祇園山笠は櫛田神社の神事とされる



櫛田神社の山笠は一年中、見られる



追い山がモチーフの博多織タペストリー

創造力、行動力、手作業が尊ばれたアナログ時代への回帰

旅行誌の編集者兼ライターから始まった我がキャリア。ニューヨークでの起業と情報誌の発行

●海外旅行誌の編集者としての基礎を培った東京時代

将来、高校の国語教師になることを夢見て、わたしは教職課程のある山口県下関市の大学に進学した。ところが大学2年の夏に1カ月、米国西海岸でホームステイしたことが契機となり、未来の展望が大転換。英語が不得意にも関わらず、海外取材ができる仕事をしたいと思いはじめた。卒業後の1988年、東京の海外旅行誌を制作する編集プロダクションに就職した。

紫煙が立ち込める雑然としたオフィス。社員の机は書籍や資料で埋め尽くされている。ワープロすら普及しておらず、原稿はすべて手書きだ。ここでは、大手旅行会社が発行する旅行ガイドブックや雑誌の制作を行っていた。ページネーション作りにはじまり、外部ライターへの原稿発注、写真選び、デザイン（レイアウト）発注、校正、写植入稿、印刷所への版下入稿など「アナログ」な編集工程を、先輩の作業を見ながら学んだ。

バブル経済全盛期の活況とは裏腹に、月給は手取り11万円。週休1日制で残業手当なし。ボーナスは雀の涙。過酷な労働と極貧生活だったが、わずか数カ月間で「旅行誌編集者」としての基本を徹底的に叩き込まれたのは幸いだった。2年半の間に、国内取材のほか、台湾やシンガポール、マレーシア、スペインなどを取材し、ガイドブックを編集した。

●東西南北の人になる。ひたすらに旅を重ねた20代

その後、創業まもない小さな広告代理店に転職。石油会社大手の月刊情報誌の編集を手掛けた。インターネットのない時代ゆえ情報収集はフットワークが勝負。自分で旅先を企画し、隔月で2カ国をドライブ取材。旧西ドイツから東ドイツ、ベルギーからオランダ、フランスからスペイン……。ソビエト連邦のペレストロイカにより、世界各国のイデオロギーが激変するなか、国境を超えて車を走らせる旅は稀有な経験となった。

更には休暇を利用して、モンゴルはじめアジア各地を旅した。ここでも2年半勤務後、27歳の春、フリーランスのライター兼編集者として独立したのだった。



アッパーウエストサイドの自宅兼オフィス（1999年）



クライアント業務の傍ら出版していた季刊誌『muse new york』

●語学留学の予定が転じて、ニューヨークで出版社起業

フリーランスになったとき「年に9カ月は無休で働き、3カ月は休暇を取り海外へ行く」と決めた。1年目は、カメラとフィルム、地図、ノートを携え、欧州を列車で放浪。2年目は英国で語学留学をした。しかし3カ月程度では英語力は大して上達しない。翌年は1年間の語学留学予定でニューヨークへ飛んだ。今からちょうど30年前。1996年のことだ。

初めてマンハッタンへ降り立ち街を歩いたとき、自分が強い磁力でストリートに引きつけられるような気がした。ずっとニューヨークに住みたいと思ったわたしは、語学学校を数カ月でやめ、現地の日系出版社に現地採用で就職。広告営業を担当した。そんな中、米国でも独立したいと切望するようになる。結果、自分で出版社Muse Publishing, Inc.を起業、自社が就労ヴィザ（H1B）のスポンサーになって自分を雇用するという作戦を思いつき実行した。前例も、情報もない中、短期間で大いに試行錯誤した結果、1997年の終わりに就労ヴィザを取得。晴れて1998年1月からニューヨークで独立したのだった。

●日本語の季刊誌『muse new york』を出版

デスクトップ・パブリッシングの黎明期。ワープロを使い始めて4年ほど経ってはいたが、パソコンは初めて。メモリ1GB、ストレージ2GB、日本語環境に設定するだけで一苦労だったPower Macintosh 8600を駆使して日本語媒体を制作した。なにしろ自分に給与を払うために、稼がねばならない。営業を重ね、大小関わらず、多くの仕事をこなした。

1999年2月、自己実現の証として季刊誌『muse new york』を創刊。企画、取材、撮影、編集、印刷、更には1万部の配達まで、すべて一人でこなしていた。東京時代の経験があったからこそ、実現できた挑戦でもあった。今なお色褪せることなく、書棚に並ぶ『muse new york』と『muse washington DC』。四半世紀の歳月を経て、このような媒体をまた作りたいと思ったのが、『サラスヴァティ』創刊の具体的な背景だ。

出会い30周年と銀婚式が重なる節目としての2026年7月。

●1996年七夕の夜、マンハッタンで出会った

1996年4月。英語を学ぶため、わたしは1年間の滞在予定でニューヨークに飛んだ。語学学校の授業が終わって放課後、ブロードウェイ沿い、リンカーンセンターの向かいにあった真新しい大型書店、BARNES & NOBLEのスターバックス・カフェで勉強をするのが、当時のわたしの日課だった。

数カ月後の7月7日、日曜日の夜のこと。わたしは込み合うカフェで席を見つけられず、カフェラテを片手に辺りを見回した。すると遠くに、ひとつだけ、空いた椅子を見つけた。テーブルの間を縫うように歩き、「ここに座ってもいいですか？」と尋ねた相手が、わたしの夫、Arvind Malhanだった。

若いころのわたしは、人生とは自らが道を切り拓くものだと思っていた。しかし、歳を重ねるごとに、あらかじめ敷かれたレールの上を走っているような気がしている。遠い過去から未来へと続くその過程は、さまざまな「ご縁」によって彩られている。先祖から託されたかのような、インドとのご縁もある。今後少しずつ、この『サラスヴァティ』に記そうと思う。

●2001年7月中旬、初のインド。ニューデリーで結婚式

出会いから5年後の7月。わたしは初めて夫の故郷ニューデリーへ飛んだ。旅を重ねていたにも関わらず、インドは未踏の地だった。インドでの結婚式がどういうものなのか、見当がつかない。当時はインターネットの情報も浅く、体験談も少ない。18歳のときにインドを離れた夫に尋ねても、「僕もよくわからないよ、結婚するのは初めてだし！」と要領を得ない。

福岡の両親と妹夫婦とは、デリー空港で合流。結婚式シーズンには不適な蒸し暑いデリーで、数日間に亘って結婚式の儀式を行う。夫の家族とわたしとは、米国で会っていたが、両家の顔合わせは初めてのこと。インドのことを何も知らず、結婚式に挑んだ。インドにはダウリと呼ばれる持参金の習慣があるのだが、そんなことは知る由もない。日本の家族は、義理の家族のもてなしを受けるばかりだった。今思えば、無知も甚だしく、無謀としか言いようがない。まるで喜劇のようなわたしたちの結婚式の記録は、「深海ライブラリ」に残している。

*インドで結婚式 (2001) の記録 <https://x.gd/nlBW7>



【七夕 たなばた】 毎年7月7日（地域により8月）に祝われる日本の伝統行事。中国の「牽牛（彦星）と織女（織姫）」の伝説がもとになっている。機織りの上手な織姫と、牛飼いの彦星は、働き者だった。しかし、二人は出会ってからというもの恋に夢中になり、仕事を疎かにしてしまったことから、天帝（天空の神）の怒りをかう。二人は天の川の兩岸に引き離され、年に一度、七夕の夜だけ会うことを許された。「カササギ」の群れが天の川の橋となり、二人を会わせてくれる。日本には奈良時代に中国から伝わり、宮中行事として広まった。江戸時代になると「五節句」の一つとなり、庶民にも浸透。短冊に願いごとを書いて笹の葉に飾る風習が定着した。

Editor's Note 編集後記

初心に還って、編集者、再び。

『サラスヴァティ』の創刊号をお読みいただき、ありがとうございます。わたしは普段からソーシャルメディアに、写真や文章を掲載し公開していますが、こうして体裁を整えることで、いつもよりずっと丁寧に、言葉に向き合いました。かつて『muse new york』を出版していたころを思い出し、懐かしくも新鮮な気持ちです。もう戻ることはないと思っていた過去の表現方法に回帰できたことを、今、とてもうれしく思います。

わたしの脳裏に、次々に記したいことが湧き上がっている今、自分の心に任せて、細く長く、続けていこうと思います。なお『サラスヴァティ』は日本語と英語の2種類を制作しています。周囲の方々にも、シェアをしていただければ幸いです。

2026年7月18日 銀婚式の日に
坂田マルハン美穂
muse.india@me.com

